

研究ノート：張愛玲余聞

齋藤 匡史

Tadashi SAITOU

「SHANGHAI」

都市は「歴史の沈殿物」であり、「歴史博物館」であると米人建築家・Colin Roweが述べているように、数千年の文明史を持つ中国において、僅か160年の短い歴史しかない上海の街にも激動の近代史の痕跡がそこかしこに横たわっている。正確に言えば1845年の英国租界（Settlement）が設置され、この租界こそが今日われわれが「上海」と呼ぶこの街の発端である。

開港後、仮のイギリス領事館が城内に設置されたが、通商に必要な倉庫やオフィスを建設する場所、通商に携わる商人とその家族の居留地の確保については、国家間の条約には取り決めがなかった。そのためイギリス領事は上海の地方行政官である「上海道台」との協議を経て、1845年に居留地の租借に合意した。これが「租界」の始まりである。道台は租借地の面積をなるべく小さくすることのみに留意し、この居留地に永久租借権、領事裁判権などを与えてしまい、国の中に清朝の主権が及ばぬ「国」を認めてしまったのである。

最初の租界は確かに小さく、北は現在の北京東路、南は延安東路、西は河南中路、東は黄浦江外灘までであった。当初、租界は外国人居留地であり、中国人の居住は認められなかった。黄浦江に望むバンド（外灘）には、波止場や商社、銀行、船会社などの西洋建築が建設され、租界都市—上海の顔が形作られていったのである。さらにイギリス人達は、馬車や馬を利用するため、江南の物流の動脈であった水路が埋め

立てられ道路が建設された。こうして上海県城の北側に新しく造営された街は当時「北市（North city）」とよばれるようになったが、後に県城をはるかに凌ぐ街の繁栄と租界の拡大により、いつしか県城の方が「南市」と称されるようになり、この国際都市「Shanghai」が上海県城を呑み込んでしまったのである。

租界は当初、外国人だけが居住していたが、戦乱から逃れてきた中国人が租界内や租界周辺に流入し、居住するようになった。これに目をつけた西洋人は住宅を建設し、中国人富裕・中産層などに分譲したり、賃貸にしたりした。これが「里弄住宅」と呼ばれた中国人用の文化住宅である。さらに租界では中国人商人が商業活動を始め、都市生活に必要なさまざまな職種も生まれ、多くの従業員階層が誕生した。また波止場の荷役労働者、水夫は中国人が従事した。

20世紀に入ると、海外貿易が飛躍的に増大し、金融業が発展した。1911年の辛亥革命により中華民国が成立し、翌年に城壁が撤去され、1914年には外濠も埋め立てられ、租界との隔たりがなくなった。このころ上海は約130万人を有する大都市となっていた。1914年の第一次世界大戦を期に上海は、紡績、製粉、煙草、造船業や軽工業が発展し、鉄道、電車、電灯、電報電話、水道、電気の文明の利器を備えた近代都市へと生まれ変わっていく。こうした経済発展により近代資本家階層と産業労働者階層が、これまでの富裕層、中間層、貧困層に加わった。

1920～30年代にかけては、外灘に上海の顔とし

て現在も残る重厚なビル建築が誕生している。

また南京路はデパートの開業などでますます繁栄し、舶来品やさまざまな商品がウインドウを飾った。当時のモダンな服飾もここから流行した。1920年代、租界居住の外国人人口の約4割を日本人が占めるようになり、虹口地区、四川北路一带には、日本人が多く暮らし、最盛期には約10万人になったと言われる。軍国主義の日本から脱出したミュージシャン、作家・文化人らも、自由の天地、欧米文化の香り漂う上海に移り住んだ。

上海の都市景観

外灘に「サッスーンハウス（現-和平飯店北楼）」、中国銀行、上海税関、「香港上海銀行（現-上海浦東発展銀行）」などオールド上海の顔として現在も残る重厚なビル建築群が誕生したのは、1920～30年代にかけてのことである。これに対し租界の街を形作っていった住宅は、『上海弄堂』（「弄堂沿革」羅小未ほか編 上海人民美術出版社1997年）によれば、木造簡易集合住宅が19世紀中葉に賃貸住宅として出現したが、のち火災予防の見地から租界当局によって禁止される。その後木材の梁や柱に煉瓦を積んだ江南地方の伝統的な住宅-いわゆる「老式石庫門里弄住宅」がこれに取って代わった。20世紀に入り、人口の爆発的増加、都市の拡大により不動産業が繁栄した。しかし集合住宅の一棟あたりの面積は狭くなり、価格、家賃も高騰した。また西洋建築の影響をうけた外観が流行するようになり、いわゆる「新式石庫門里弄住宅」が出現する。さらに1920年代は、人口増による地価の高騰で3階建ての石庫門が出現すると同時に西洋のアパート建築の様式を取り入れ、玄関前に庭の付いた「新式里弄」と集合住宅ながら一戸建て

風の洋館里弄と「公寓」（マンション）が出現したと言う。外灘の西洋建築群が正面の顔とすれば、石庫門里弄住宅や洋館は、フランス梧桐樹の並木道とともに上海の街の原風景を形作ったのである。

上述のように「Shanghai-上海」は、西洋文明の上に成り立った都市であり、中華文明の代表とも言うべき北京、西安はもとより、江南地方の小邑ともまったく異なる「中華文明の伝統を受け継がない街」と言ってよい。古い伝統、価値観が否定され、文明と文明が衝突、融合して独自の文化を作り上げ、近代都市文明と同質のものが形成されていった。

上海は国際都市化する中で単に貿易、金融の中心都市となっただけでなく、芸術、文化の面でも他の中国の都市にぬきんでていた。それは人、モノ、情報の自由な移動、市場経済化された自由競争社会、商品化された娯楽文化、思想、言論の一定の自由がそこにあり、租界で暮らす中国人（移住者）は、身分にとらわれず、自らの才覚と努力で地位を勝ち得ることができたからである。租界居住者は「植民地の奴隷」ではなく、「自由都市-租界」の「市民」であった。

1940年代、この街に彗星のごとく現れ、この街の文化・文明を滋養として育った流行作家-張愛玲は、モダニズムと懐古趣味、万古から変わることの無い人間個人の葛藤を文学として紡いだ作家である。1950年代初、愛して止まぬ物が次々と消失し、過去が否定される中、彼女はもうここに留まる理由が見つからなくなったからか、香港を経て、ニューヨークに移った。なぜニューヨークを居住地に選んだのかという質問に、張愛玲は「上海に似ているから」とだけ答えている（出所は失念した。ただし1973から逝去まではロサンゼルスに居住）。

1995年9月8日に逝去、9月30日の誕生日に遺

骨は太平洋から上海に向けて撒かれた。

静安寺・愛丁頓公寓

作家－張愛玲は（1920.9.30－1995.9.8 75歳没）、現在の康定東路87弄（当時、麦根路）の重厚な造りの洋館で生まれた。周知のことだが、祖父は清朝大臣－張佩綸、祖母は李鴻章の娘－李菊耦、母は南京長江水師提督黃軍門、黃宗炎の娘である。

22歳の年（1942年）、日本軍の香港占領により、張愛玲は香港での勉学を切り上げ、上海に戻り、叔母とともに赫徳路（現、常德路）192号の「愛丁頓公寓」に暮らす。愛丁頓公寓は張愛玲が作家として名声を得た『傾城之恋』、『沈香屑』、『金鎖記』など多くの作品を生んだ場であり、胡蘭成と密かに結婚したところでもある。この公寓のすぐ北側の愚園路を西少し行けば、すぐに静安寺の「百樂門舞庁（パラマウント・ダンスホール）」が見える。夜ともなれば、このダンスホールからの騒々しい音楽が、居室まで聞こえてきたと張愛玲は書いている。いま「愛丁頓公寓」は「常德公寓」と名を変えたが、上海市の重要保存建築物としてアールデコ建築の姿を残している。

『静安寺の銃声』（『上海の最後旧夢』樹菜著 上海古籍出版社1999年）は、この場で起きた銃撃戦の状況を著者の幼い記憶をもとに綴っている。それは1941年の太平洋戦争勃発前まで、静安寺は「公共租界」と「越界築路区（租界当局が軍用道路敷設を名目に敷設した道路とその周辺を施政下に置き、實際上租界を拡張した地区）」が交差しており、このとき越界築路外はすでに日本軍の手に落ちていて、汪兆銘政権の施政権下にあった。汪兆銘政権の「特工部（中国国民党中央執行委員会政治委員会特務委員会特工総部）」が1939年初

から1943年初にかけて、静安寺北西の極司非而路（現－万航渡路）76号にあり、テロ、暗殺、誘拐、暴行など、傀儡政権の維持のため、敵や反対派を抑える活動を行い、「殺人の巢窟」として市民から恐れられる存在であったと言われる。元重慶政府軍統局第三処長の丁黙邨と暗黒街と関係の深い李士群が特務工作員300余人を集め、対重慶政府テロに暗躍、この実働部隊の頭目が「青幫」の呉四寶（呉世寶とも、四と世は上海語で諧音）で、もと日本陸軍特務機関「梅機関」（影佐禎昭大佐が対汪兆銘工作にあたった。「梅花堂」とも呼ばれ、虹口北四川路永樂坊にあった）に所属していた。「青幫」で名の知れた季雲卿の義理の娘余愛珍を夫人に迎えていた。

事件の日（同著者は1940年のある月の日曜日の午後としか記憶していない）、余愛珍は予約してあった「百樂理髮庁」に運転手、護衛1名とともに車で向かった。極司非而路を南下、愛文義路（北京西路）交差点から先は、共同租界となる。普段なら警備に当る巡捕（警官）は、76号特工部の「呉四寶夫人」の車を咎めることは無いのだが、この時ばかりは、職務に忠実な英国人警官が規則に従い、運転手と護衛に武器を差し出すよう求めた。双方確執の中、印度人巡捕が緊張のあまり引き金を引き、運転手を射殺。護衛はすぐに反撃し巡捕を射殺する。応援に駆けつけた巡捕隊との銃撃戦となったが、ほどなく制圧され、護衛は死亡。車中から奇跡的に無傷の余愛珍の身柄を拘束し、静安寺巡捕房（警察署）に引き上げた。一方で巡捕房は特工部の報復を警戒し、防御線を築こうとした矢先、重機関銃で武装した特工部の数10名が2台のトラックに乗り、共同租界に入り、巡捕房に照準を定め、余愛珍の引渡しを要求した。

知らせを聞いた、呉四寶は現場に駆けつけ、部下たちを共同租界外の愛文義路交差点まで撤退さ

せ、妻の身柄の確保を日本軍憲兵隊に任せた。事件はこの後、和解で幕切れとなるが、静安寺巡捕房への報復は続いたという。

ここで注目すべきは、余愛珍である。余は1942年呉四寶の死亡後（内紛で李士群によって毒殺された）、当時、汪兆銘政権の「中央宣伝部常務次長」であった胡蘭成と同棲し、抗日戦終結後、二人で浙江省天台の寒村に潜伏。結局逮捕され、余は7年（『漢奸裁判史』益井康一 みすず書房 1977では、1946年6月上海高等法院で15年の刑となる）、胡は10年の刑で提籃橋監獄に収監されるも、1949年、解放軍が上海に迫る中、国民党当局によって釈放され、二人は香港に逃げた、と著者の樹菜は書いている。

張愛玲が胡蘭成の訪問を受けたのは、1944年2月で、夏には結婚の誓約にサインしている。もっとも胡蘭成は、その12月に、武漢で看護士の小周と懇ろな仲になっているのである。前述のように、1945年日本の降伏により、「漢奸」罪を恐れ、胡は浙江省温州へ逃亡する。翌46年2月、張愛玲は胡を温州に訪ね、小周との訣別を迫るが、胡の態度が煮え切らず、上海に戻っている（この時張愛玲は偶然、公園で「範秀美」という女性と胡が親しげな様子も目撃する）。胡蘭成の女性遍歴を傍証する意図は無いが、この通説と樹菜の記述内容が食い違うのには判然としないものがある。

銃撃戦事件が起きた1940年、張愛玲は香港大学で勉学中であり、事件とはなんら関係はない。だが樹菜の記憶と記述が正しいとすれば、事件が起きた場所から、400mほどしか離れていない赫徳路の「愛丁頓公寓」に1942年11月頃から叔母とともに暮らし始め、ここで余愛珍を愛人とした（？）胡蘭成の訪問を受けた訳である。また胡蘭成の自宅（美麗園）もここから1 km以内にあった。歴史の偶然がそう広くない場で発生している

のである。

このマンション生活の有様は、『公寓生活記趣』（1943.12）に綴られており、8年半に渡る生活から、張愛玲文学の中心的作品を多く生み出している。張愛玲が暮らした時代の静安寺は、滬西の屋敷街、住宅街でそう繁華な地区ではなかった。

1990年代中頃まで、静安寺は単なるトロリーバスの終点車庫で、滬西の古刹として名高かった寺院は住宅や工場の建築物に飲み込まれて荒れ放題、わずかにレンガ造りの小さな山門を確認するのみ。商店も極めて少なく、パラマウントビルの電飾も無かった。もっとも張愛玲の時代、現在の静安公園は墓地であり、薄気味悪いので足早に通ったと張愛玲は記している。現在の静安寺は、寺院は立派な伽藍を構え、外資系デパート、シティエアターミナル、数々の商店・レストラン、外資系ホテル、地下鉄駅、高級マンションなどを有しながらも落ち着いた雰囲気のある繁華街となっている。夜ともなればパラマウントビルの派手な電飾とダンスホールの音楽が往時を偲ばせてくれるし、墓場だった静安公園、静安寺広場のイルミネーションも美しい。そして愛丁頓公寓（常德公寓）は周囲の変遷を気に止めないかのように老躯を端正に留めている。

上海の我が家の隣は戦時、天津から新たに移転してきた起士林（キースリング）珈琲館があつて、毎日明け方にパンを焼いており、嗅覚の警報は呼び起こされ、香ばしい匂いが空気を突くかのごとくやって来るのであつた。

張愛玲 < 談吃与画餅充飢 > 台北皇冠出版社1988年2月

「紅学」の傍証のように瑣末なことかもしれな

いが（文学研究はどこまでが瑣末でどこまでが瑣末でないのか判然としないものがある）、その誇りを承知の上、敢えて言えば、「起士林珈琲館」の場所を誤認させる記述の存在を指摘しておかねばならない。その文章では南京西路1528号のカフェ「奥维斯（オールウェイズ）」が「起士林珈琲館」とされており、それが新聞雑誌に掲載され、その記事を持った張愛玲ファンが訪れているというが、「上海の我が家の隣（原文-「隔壁」）は戦時、天津から新たに移転してきた起士林（キースリング）珈琲館で」との叙述があり、パンの香ばしい匂いが毎日「南京西路1528号（現-常德路と南京西路の交差点より東寄り、直線距離約100m）」から公寓の5階（1942年から6階）届いたということになるし、「我が家の隣（原文-「隔壁」）」ではなく「斜向かい」例えば中国語の「斜対面」、「対面」や「附近」と表現されていないことからこの説は説得力に欠ける。

『張愛玲地図』（淳子著、2003年9月、漢語第詞典出版社）では、カ爾登公寓（長江公寓、入居は1950年以降で、1952年ここから出国）居住時に近くにあった「起士林珈琲館」を回想しての記述とする。これは南京西路72号、金門飯店の東側にあった「起士林食品店」（ドイツ菓子、パンの製造販売。解放後、喜來臨食品廠と改名。『上海文化源流辞典』1992年上海社会科学院版）を指すと思われるが、直線距離で約250mとマンションとの距離はさらに遠い。だが『張愛玲地図』ではっきりと南京西路72号の「起士林」と断定している。「起士林食品店」は1938年創業で、「戦時、天津から新たに移転してきた」（戦時-1937年7月から1945年7月）ことを手元の文献では確認できないが、時間的には符合している。しかしこの説も距離的な問題と「我が家の隣（原文-「隔壁」）」という表現をどう読むかという問題が残る。

在 20 世纪 30 年代“凱司令”西餐館是开在赫德路(今常德路)女作家张爱玲住的公寓楼底层,并在静安寺路静安别墅东面开有分店,经营德国菜和蛋糕。(略)之后“凱司令”西餐館几经搬迁至现在的南京西路。

《在“凱司令”喝下午茶》作者 lilif, 携程旅行网游记 2005 年 5 月

（訳-20世紀30年代「凱司令」洋食店は赫德路<今の常德路>の女作家張愛玲が住んでいたマンションの1階で営業しており、さらに静安寺路の静安別荘の東に支店があり、ドイツ料理とケーキを扱っていた。<略>その後「凱司令」洋食店は何度かの移転を経て現在の南京西路に移った）

上記文章はドイツ菓子店の「凱司令」本店が「愛丁頓公寓」にあったとするものだが、創業は1928年と文献にあり、「戦時、天津から新たに移転してきた」という記述には合わない。しかし「我が家の隣」とパンを製造する匂いからすれば現実味を帯びてくる。この場合『談喫與画餅充饑』が1988年の作で、半世紀前の記憶を張愛玲が混同したとの推測が成り立つことが前提で、この説はさらに想像し難い大きな矛盾を持つことになる。ここでは瑣末な事柄にもこのような疑問が残るということを記しておくに留める。

上海から香港へ

人民解放軍100万の将兵は1949年4月21日に長江を渡河し、23日に南京を解放、5月3日に杭州を解放し、ここに上海解放に向けた完全包囲網が組まれる。国民党京滬杭警備司令-湯恩伯は蔣介

石の厳命を受け、20万の部隊で上海を死守しようとしたが、浦東、浦西の両面から迫る解放軍第三野戦軍に押され敗退、残存部隊5万は浦東から船で敗走し、5月27日、解放軍はついに上海に入城した。この時、張愛玲は叔母と、南京西路を行進する解放軍を「重華公寓」（現在の新鎮江飯店の場所）の2階の部屋から眺めている。

出身家庭、胡蘭成との関係、李香蘭との雑誌での対談（1945年7月21日『新中国文化』納涼会）だけをとり、革命政権下での政治的な生存は危ういし、ましてやこれまでの文学スタンスを保ったまま作家として生きてゆくのは難しいことは十分承知していたはずである。これについては『「伝奇」増訂本「序言」』（1946年）に張愛玲の心情が書き綴られていると『沈香屑里的旧事－張愛玲伝』（任茹文、王艷著 団結出版社 2001年1月、p224）では、「序言」の記述を指摘しており、以下その大意を引用する。

私はこれまで自己弁護が必要だとは思ってなかったが、この一年来しばしばそのことが論議され、まるで文化界の裏切者（原文－文化漢奸）の一人に並べられているようだ。まったくおかしなことだと思う。これまで政治に係わる文章を書いたこともないし、いかなる役職就任の依頼を受けたことも無い。唯一の嫌疑といえは所謂「大東亜文学第3回大会」の出席依頼を受け、新聞紙上にそのリストが掲載され、自分の名がそこにあったことによるものかと思うが、しかし文書で出席を断っている。私生活上のことでもあれこれと誇りがあるが、それに対し反駁できる点が多い。もしそのような批判が事実であったとしても、裏切者か否かの嫌疑の問題には係らないし、私人の事柄を皆に説明する必要も無い。…だから黙っている。同時に

そのような批判文の是非を問う裁判を起こす時間的、精神的余裕はない。…しかしながらずっと黙っていて、自分の立場について明らかにしないと、社会に誤った印象を与え続け、私の行く先を心配してくださる人々には申し訳なく思う。

彼女自身は胡蘭成がたとえ裏切者であったとしても、自分はその問題とはなんら関係なく、それは男女関係というプライバシーの問題であるとの立場をとったのであろう（この「文化漢奸」問題は今日においてもなお存在し、「張愛玲熱」に冷や水をかけるかのように批判論文が見られる）。

1950年7月24日－29日、上海市文藝工作者代表大会が開催され、500人余りがこれに出席、張愛玲は左翼文学界の大立者－夏衍（劇作家、左聯活動家、中共黨員）を通じて招待を受けたが、会場の最後列に座り、この時、彼女はチャイナドレスに白いレースのカーディガンという服装であったという。張愛玲が『太太萬歲』、『不了情』などの映画脚本を手がけていたためであろう、夏衍は上海電影劇本創作所での仕事を斡旋したが、張愛玲は断った。前出の『張愛玲伝』は、張愛玲の創作所入りに反対する者があったという。さらに文華電影公司の龔之方、桑弧が張愛玲と面談した際、上海に留まるよう伝えたが、張愛玲は返事をしなかった。そのため夏衍達はこの才能ある作家を上海に留め置こうと映画制作者の桑弧との結婚を画策したが、何度も断られ、ゴシップ紙の伝えるところとなったという。

ここで恐らくはもはや上海に留まっては行かないと張愛玲に考えさせたであろう母校聖マリア女学校の改革について記しておく。

1952年7月6日『申報』は、中西女子中学と聖

マリア女子中学が合併し「上海市第三女子中学」が成立したことを伝えた。解放後も宗教科目を続け、学生が社会活動に参加することを禁じ、人民政府の法令に対抗する態度を取った教会系の学校もあった。記事では「帝国主義文化侵略の影響を一掃し、人民教育事業を立派に行い、多くの祖国建設の優秀な人材を育成するため、市教育局は中西女子中学と聖マリア女子中学を接収し、両校を合併させて上海市第三女子中学とすることを決定した」というもので、「この両校は帝国主義者が中国人民に対し、文化侵略を行う道具であり、中国の青少年の思想に害毒を与える大本営である」、また両校は「民族意識を消滅させ、祖国を忘れさせ、祖国を裏切る敵の回し者を大量に作り出した」と断罪した。張愛玲が薰陶を受けた学校がかくのごとく処断され、卒業生までもが帝国主義の「走狗」とされたのである。

7月18日、台風が浙江近海に近づき、24時間後、台風が上海付近に来るとの発表があった。マスコミはプチブル思想との闘争キャンペーンを張った。

7月21日、上海市第三女子中学の卒業生は、政府の就業計画に従うことが義務付けられ、職業選択ができなくなった。

7月23日20時、台風警報は解除されたが、思想改造の「嵐」はますます強く吹き荒れた。

7月31日、『申報』に第三女子中学教師の寄稿、「ブルジョア階級の墮落した生活が、私を是非のわからぬ、敵味方のわからぬ人間にした」を掲載した。

1952年7月、張愛玲は、生まれ故郷、作家として名声を得た上海の街を離れた。解放から3年の時が経っていたが、1939年から3年間の香港大学での学業が日本軍の香港占領で志半ばのままだったため、それを補うためという名目で出国が許さ

れたのである。

『同学少年都不賤』は張愛玲没後（1996.12）、2004年2月、台湾の皇冠出版社が他の遺稿4作品と共に同タイトルで出版し、同時に天津人民出版社が簡体字版を出したものである。この本の付録に8枚の写真がある。興味深いのは1952年上海で撮った顔写真と並ぶ1954年香港で撮った半身の写真の表情である。顔写真の方は恐らく当時の「工作証」か旅券用であろう；断髪にパーマをかけ、深い憂いを感じさせる。これに対し香港の写真は派手な緞子の伝統的な上着をまとい、顎をやや上にあげ得意満面の様子で、微笑みを浮かべており、我々の知る張愛玲本来のポーズである。無論、写真は編集者が収録したもので張愛玲自身が意図したものではないし、スナップ写真と証明書用写真(?)の違いもあるが、この頃の彼女の精神状態を如実に表すものと取れなくも無い。

『張愛玲熱（ブーム）』・『張愛玲地図』

大陸での張愛玲受容の過程は、温儒敏『張愛玲熱』的興発與変遷』（北京大学教授、原載『中華読書報』2000.12.27）に詳しい。これは2000年10月に開催された、「張愛玲與現代中文文学」国際研究討論会での筆者の報告である。温儒敏によれば、発端は70年代後半、大陸の現代文学評価とまったく異なる夏志清著『中国現代小説史』（英文版）が研究者の間で話題になり、その中で張愛玲、錢鐘書、沈從文に高い評価が与えられており、多くの若手研究者はここで30年近く忘れ去られていた女流作家を知ることになった。

当時文学界は文革で否定された作品、作家の再評価の真最中で、張愛玲についてはそれ以上何も出てこなかったという。階級闘争史的文学観、社会主義リアリズム、毛沢東の文藝観（魯迅絶対の

文学観)が唯一の大陸において、魯迅評価の低い論者の評論など話題にできるはずが無く、無理からぬところである。80年代中期、柯霊『遙寄張愛玲』の評論と同時に当時影響のあった文学誌『收穫』に張愛玲の小説『傾城之恋』が再収録された。しかし1950年代の『赤地之恋』、『秧歌』等の「反共小説」、「政治的“身分”の複雑さ」(温儒敏の言、「身分」は「漢奸」の嫌疑)の問題から、張愛玲作品への積極的な議論や評価には慎重で、一部の評論のみで紹介が行われたに過ぎなかったと言う。その後、「創作手法」の議論が論壇で賑やかになった時、張愛玲の手法の独特さ、情調、シンボリズム、心理描写などが注目され、芸術的技巧の論証の角度から作品が取り上げられるとともに、その社会性つまり租界社会の陰暗面の明示、反封建的価値、都市文学としての風格を積極的に肯定し、作品の深い人間性の内包がモダニズムの特徴を持つものとして取り上げられたという。こうした学術界の動向を睨みながら出版社は、人民文学出版社の張愛玲小説集『伝奇』(1986)の公刊を契機に、流行しそうな恋愛物の作品を次々と世に送った。

1993年から1995年にかけては、大学院生の論文の格好のテーマとして取り上げられ、作品構造分析、心理描写、文化類型、女性等の観点から論じられた。他方、出版では「伝記」、「伝奇」をキーワードに張愛玲作品や作家の生涯を紹介した書籍が大量に出回ったという。また「純文学の基準」から張愛玲が見直されて、1995年9月の逝去を境に更なる「張愛玲熱」が巻き起こる。

このころから市場経済化の進展と共に価値観の多様化、都市新市民階層の形成が進み、個々人の生活の喜怒哀楽、人生の情欲、男女の離合悲哀、情感、繊細な感受性等を綴る張愛玲作品が多くの読者を獲得することになる。出版界は懐旧ブーム

に張愛玲を乗せて、往時の上海や張愛玲の写真をふんだんに使った書籍、恋愛論や人生訓に仕立てた書、懐旧趣味の散文集など大量の張愛玲「製品」を世に送った。これらを「張愛玲文学を切り売ったもの」として温儒敏は断じているが、読者は文学的価値を論じるためだけに作品を読むのではなく、個々人の嗜好や趣味、疑似体験の場また心の安逸を求めて作品に接するという文学本来の役どころを張愛玲文学が伝えてくれたと見ることはできないか。

『張愛玲地図』は張愛玲文学入門書としてまたそれ自身文学作品として秀でている。この書を著した意図を著者は次のように述べている。

一人の女性、一人の作家、一区切りの歲月、ひとつの都会、この四者の間に纏わり、孕む関係を解析し、張愛玲の生きた時代、作品から伝わる生きることの悲哀、愛の困難さという生命の本来の姿を身を以て感じ取りたかったからである。

(同書「序」より)

上海に生まれ上海を離れるまで、作家が暮らしたゆかりの地を巡りながら、決して安易な探訪記でもない、検証のための記録でもない作家の生きた時代、空間を著者の思いを散りばめながら綴った「文学」である。ほとんど同時期に出版された『尋訪魯迅在上海的足跡』(2003.7)は、革命者—魯迅の足跡を実証し、顕彰するためのものであり、好対照を成す。

大陸における張愛玲ブームは張愛玲文学の再評価に留まらず、「淪陷区(敵占領地区)」作家の問題、「反共小説」の問題について新たな視点から論じる研究論文も発表されているが、これについては稿を改めて述べたい。

『張愛玲研究論文目録』について

『張愛玲研究論文目録』（『東亜経済研究』第64巻第1号、2005年7月に掲載）は、『復印報刊資料－中国現代、当代文学研究』（中国人民大学書報資料中心）、1996年第1期から2005年第4期までに掲載された論文と論文索引、および『中国現代文学研究叢刊』（作家出版社）の「研究論文索引」が掲載され始めた1993年1期から2005年2期までに紹介された論文、批評等を収録したものである。先行の文献目録には、『張愛玲関係文献目録』梁有紀（『未名』中文研究会1996年3月）に「大陸篇」として1943年5月から1996年4月までの100項目が、また『海上花開又花落－解読張愛玲』万燕（1996年8月、百花洲出版社）の「国内外張愛玲研究資料索引総編」に香港、台湾を中心に、

1944年から1996年1月までの関連論文を収めている。さらに『伝奇文学と流言人生－1940年代上海・張愛玲の文学』邵迎建（お茶の水書房 2002年10月）「参考文献」中に、「綜合資料」、「日本語文献」、「日本語訳書」、「台湾・香港における張愛玲関係資料」と「大陸における張愛玲関係資料」（1982年11月～1996年、40項目）、「日本における張愛玲関係の文献目録」が附されている。本目録はこれら先行の業績を補遺する意味から作成した。

その後『復印報刊資料－中国現代、当代文学研究』2005年第5期から2006年第3期（2005年度分）までに掲載された論文と論文索引、および『中国現代文学研究叢刊』の「研究論文索引」（収録論文数は極めて少ない）2005年3期から6期（2004年度分）までに紹介された論文、批評等の数も加えた（補遺分については本稿末尾に付した）。

年次	論文数	年次	論文数
1993	1	2000	57
1994	4	2001	47
1995	17	2002	47
1996	10	2003	48
1997	13	2004	138
1998	46	2005	103
1999	32		

※2005年度分に『中国現代文学研究叢刊』2005年度収録論文は含まれない。

【研究論文目録補遺】（2006年11月現在）

2004年（補）

冷言冷笔，冷嘲冷讽：论张爱玲小说的讽刺艺术 闫秀平

胜利油田师范专科学校学报(东营) 2004.4 15-17

论张爱玲小说的召唤性：东红 黎明职业大学学报(泉州)

2004.4 16-19

走下神坛的母亲：论张爱玲对传统母亲形象的颠覆 曾琪

江西师范大学学报哲科版 2004.6 58-61

与迅雨对话：张爱玲的女性修辞：姚玳玫 新文学史料

2004.3

城市里的民间世界：《倾城之恋》 陈思和 杭州师范学院学

报 2004.4

青春的张爱玲：由胡兰成的《评张爱玲》谈起之一 刘锋杰

- 海南师范学院学报 2004.4
- 母亲形象的错位与异化：焦母与曹七巧合论 杨爱芹 齐鲁学刊 2004.5
- 2005年 (続)
- “南玲北梅”女性意识比较：李果 郑州轻工业学院学报社科版 2005.1 69-71
- 隐秘历史的现代书写：析张爱玲长篇小说《半生缘》 马永生 西北第二民族学院学报哲社版(银川)2005.1 120-124
- 沉隐与苍凉：论张爱玲小说的人生主题 郭晓鸿 杭州师范学院学报社科版 2005.1 42-46,61
- 张爱玲小说中的几种女性形象剖析：姚昌美 湖南科技学院学报(永州) 2005.1 230-231
- 张爱玲小说中的意象选择及视角创新：王文参 中州学刊(郑州) 2005.1 179-183
- 无尽的苍凉：浅谈张爱玲《倾城之恋》中的悲剧色彩 林珊 南平师专学报(武夷山) 2005.1 60-62
- 张爱玲与王安忆小说文本中的女性写作姿态的比较：刘宁 江西社会科学(南昌) 2005.1 136-140
- 独特的个性魅力：张爱玲小说创作意蕴 栾慎勇 理论观察(齐齐哈尔) 2005.1 82-83
- 母与己的冲突：试论张爱玲的审母意识及其缘由 幸英鸾 达县师范高等专科学校学报社科版 2005.1 42-45
- 论张爱玲小说中的时间意识：程箐,刘建春江西社会科学(南昌)2005.1 131-135
- 张爱玲散文创作的人本主义特色：刘珂珂 泰山学院学报 2005.1 33-36
- 时空的断裂：张爱玲小说中的时空结构 金昕 海南广播电视大学学报综合版 2005.1 18-20
- 张爱玲：殖民地语境下的人性 郑万鹏海南广播电视大学学报综合版 2005.1 16-17
- 论张爱玲小说中的魂恋观：宋红芳 盐城师范学院学报人文社科版 2005.1 68-71
- 真幻虚实,交融叠化：解读张爱玲小说的镜子意象 庄超颖 泉州师范学院学报社会科学 2005.1 96-100
- 《金锁记》中曹七巧人物形象分析：陶春军盐城师范学院学报人文社科版 2005.1 72-75
- 读者接受与张爱玲小说：李军 柳州师范专科学校学报 2005.1 42-45
- 从“参差的对照”看张爱玲小说的俗与雅：刘志华 涪陵师范学院学报(重庆) 2005.1 29-33
- 女性叙事话语的两种美学建构：张爱玲、王安忆小说审美风格比较 孙丽玲 楚雄师范学院学报 2005.1 24-28
- 浅谈张爱玲小说“语言双关”的语言艺术：魏松英 胜利油田师范专科学校学报 2005.1 6-7
- 惆怅旧欢如梦：浅析张爱玲小说的悲剧意识和特色 温蕾 商丘职业技术学院学报 2005.1 46-48
- 论张爱玲《传奇》叙事的心理时间模式：王东,张文东 东北师范大学学报哲科版 2005.2 82-86
- 张爱玲作品中的代表意象：苏娟 国际关系学院学报(京) 2005.2 68-72
- 论张爱玲小说中的苍凉意识：赵晓红,谭晓云 云南财贸学院学报社科版 2005.2 146-147
- 日常凡俗生活的建构与解构：论张爱玲早期的散文创作 傅湘莉 上饶师范学院学报社科版 2005.2 77-80
- 论张爱玲小说叙事视角的陌生化：王卫英 社科纵横(兰州) 2005.2 162-163
- 寻求着的声音：对张爱玲《倾城之恋》的一种解读 贺玉庆 湖南人文科技学院学报(娄底) 2005.2 54-56
- 热闹和荒凉的边缘：张爱玲小说中的对话—解释思想及其艺术境界 王琼 宝鸡文理学院学报 2005.2 88-92
- 张爱玲小说中的讽刺艺术：李新民 宝鸡文理学院学报 2005.2 76-81
- 张爱玲小说的圆形结构艺术：张兰生 海南广播电视大学学报综合版 2005.2 6-8
- 论婚姻与爱情缺失性体验对张爱玲小说创作的影响：王亚平 岳阳职业技术学院学报 2005.2 81-83
- 对人性真相的揭示与还原：张爱玲作品再探 杨帆,乐小俐 湖南工程学院学报(湘潭) 2005.2 56-58
- 古典的壳,现代的魂：谈张爱玲小说的创作手法 刘珂珂

- 山东商业职业技术学院学报 2005 2 70-73
- 女性命运的象征：解读《金锁记》中的月亮意象 李如 黄山学院学报 2005 2 92-94
- 评《半生缘》兼析张爱玲小说的审美特征：张廷山 中共郑州市委党校学报 2005.2 82-83
- 都市的变迁与作家的书写：从张爱玲到王安忆 高秀芹 山花(贵州) 2005.3 122-127
- 张爱玲怕谁？：苏友贞 万象(京) 2005.3 58-70
- 突入苍凉的灵魂深处：张爱玲小说中的意象营造 金振胜 天中学刊(驻马店) 2005.3 95-96
- 对张爱玲小说中起畸形婚姻的再认识：钱进 聊城大学学报 社科版 2005.3 220-221
- 张爱玲笔下的 1950 年代：文学自由谈(津) 2005.3 92-100
- 张爱玲与传统文学中的“意象”：惠转宁 沈阳师范大学学报 社科版 2005.3 87-90
- 略谈张爱玲小说的奇喻：廖小勤 四川教育学院学报 2005.3 53-55
- 倾慕现代，抑或呼唤传统：论张爱玲小说的中国文化精神 李建秋 四川教育学院学报 2005.3 49-52
- 《金锁记》人性化主题的心理学剖析：许慧瑞 青海师专学报(教育科学) 2005.3 46-48
- 论张爱玲《传奇》中的“封锁”情节：李培 长春师范学院学报 人文社科版 2005.3 80-82
- 张爱玲小说中“苍凉”基调中的文化反思：夏红冰 安庆师范学院学报 社科版 2005.3 74-78
- 曹七巧与希刺克利夫报复心里比较：杨艳妮 语言学刊高教版(呼和浩特) 2005.3 68-69
- 人本主义的幻灭：谈张爱玲小说创作中对爱的解析 刘珂珂 山东省经济管理干部学院学报 2005.3 122-124
- 苏青与张爱玲的女性意识：陈红玲 求索(长沙) 2005.3 165-166
- 萧红张爱玲为人与为文的比较研究：姜丽娜,陈新 佳木斯大学社会科学学报 2005.3 56-57
- 鲁迅影响下的萧红与张爱玲：萧红张爱玲创作比较研究：刘军佳 佳木斯大学社会科学学报 2005.3 53-55
- 张爱玲与王安忆上海小说中的女性意识：邓寒梅 湘南学院学报(郴州) 2005 3 29-32
- 传统与现代的结合：从叙事角度看《倾城之恋》 杨国凤 绍兴文理学院学报 2005.3 58-60
- 叙述者的身份和位置的转变：浅析张爱玲小说的叙述学特征 周宏,乔淑英 石家庄职业技术学院学报 2005.3 56-58
- 上海文化与张爱玲：王巧凤 太原师范学院学报 社科版 2005.3 71-73
- 论张爱玲小说意象营造：王林义 太原师范学院学报 社科版 2005.3 74-77
- 走下神坛的女性自我世界：论张爱玲小说中的女性形象 尹携携 西安电子科技大学学报 2005.3 115-119
- 两种枷锁下的悲剧：论《十八春》的思想意义 王凌晨 淮北职业技术学院学报 2005.3 42-43,48
- 心理世界的探寻：简论张爱玲《同学少年都不贱》的心理叙事艺术 奚志英 盐城工学院学报 2005.3 43-46
- “张爱玲传记”不同文本之比较：兼论现代传记的叙事特征 张慧芳 荆门职业技术学院学报 2005.4 39-42
- 对男权中心文化性别观念的根本颠覆：张爱玲《红玫瑰与白玫瑰》的重新解读 胡秦葆,陈永光 湖南科技大学学报 社科版 2005.4 112-115
- 焦虑的叙述：浅析张爱玲及其作品中的焦虑因素 冯昊 社会科学家(桂林) 2005.4 42-44
- 张爱玲对普通人的认同：雷素娟 安庆师范学院学报 社科版 2005 4 83-86
- 探视张爱玲笔下的女性人生：张瑛 周口师范学院学报 2005.4 46-47
- 认同主题的显现与退隐：张爱玲小说创作辉煌期的认同分析 梁彬 沈阳师范大学学报 社科版 2005 4 63-65
- 论张爱玲的人生哲学在其小说中的投射：兼谈《同学少年都不贱》的生命体验 胡言会 涪陵师范学院学报 2005.4 33-36
- 论张爱玲“母爱缺失心理”在小说文本中的反映：李迪 芜湖师专学报 2005.4 27-28

- 张爱玲小说中的叛父、审父意识：邵丽坤 绥化学院学报
2005.4 46-48
- 论张爱玲的女性意识及其女性创作主题：丁琪 海南师范学院学报社科版 2005.4 53-56
- 试论“阳台”与张爱玲创作的关系：张岩铭海南师范学院学报社科版 2005.4 57-60
- 试论张爱玲小说世界中的生存理念：张文东,王东 长春师范学院学报 2005.4 92-93
- 香港·女性·传奇：《倾城之恋》、《香港的情与爱》、《怀旧怨》比较 黄静 华文文学(汕头) 2005.4 30-35
- 谋生与谋爱, 魔界与神界：张爱玲王安忆小说比较 吴芸茜 华文文学(汕头) 2005.4 64-70
- 试解《心经》中的恋父情结：赵学峰 河西学院学报(张掖) 2005.4 34-36
- 独自把玩的人性世界：张爱玲作品研究之一 江岩 南京理工大学学报社科版 2005.4 29-32
- 张爱玲小说中的女性异化现象：黄薇 河池学院学报哲社版(宜州) 2005.4 55-58
- 从张爱玲作品看上海都市文化认同的从容与焦虑：雷蕾,陈华明 西南民族大学学报 2005.5 234-235
- 试论张爱玲小说的文学史价值：温静, 卢苓霞 学术交流(哈尔滨) 2005.5 165-169
- 沉沦与反叛：论张爱玲小说对女性灵魂的重新审视与女性命运的深入探寻 徐日君 理论界(沈阳) 2005.5 194-195
- 张爱玲的人生观与创作观探微：陈红玲 语言学刊高教版 2005.5 30-33
- 咀嚼悲凉：张爱玲作品叠言艺术解读：王玉梅 语言学刊高教版 2005.5 34-37
- 萧红与张爱玲的女性意识比较：段金花 东岳论丛(济南) 2005.5 121-123
- 浮世的悲哀：张爱玲的日常生活哲学 王宏图 复旦学报社科版 2005.5 188-194
- 从毛姆、卡夫卡到张爱玲：张爱玲的现代性之发生 刘锋杰 佛山科学技术学院学报社科版 2005.5 1-7
- 从日常生活叙事看张爱玲小说的现代意义：董文桃 云南社会科学 2005.5 112-116
- 失衡的人性：论张爱玲小说中的男性形象：潘华 湛江师范学院学报 2005.5 46-48
- 论鲁迅和张爱玲的主题悲剧意识：张琴凤 沈阳师范大学学报社科版 2005.6 97-100
- 张爱玲给吉田丰子的信：张欣 中国现代文学研究丛刊 2005.6 231-236
- “中国”人生中的荒诞意识：也谈张爱玲小说的“苍凉” 安月辉 社会科学论坛(石家庄) 2005.6B 28-30
- “丑”趣：论张爱玲小说中的死亡意象：李祥伟 学术论坛(南宁) 2005.6 140-143
- 传播学视野下的“张爱玲热”：曾琪 东岳论丛 2005.6 129-131
- 常与非常：张爱玲《传奇》叙事之结构模式 张文东 吉林大学社会科学学报 2005.6 38-44
- 论“张爱玲现象”的现代文学史意义：宋剑华 涪陵师范学院学报 2005.6 6-18
- 张爱玲小说对人的命运及人性的探索：李雅妮 晋中学院学报 2005.6 43-46
- 浮华背后：《传奇》意象世界里的苍凉：魏艳 昭通师范高等专科学校学报(云南) 2005.6 26-30
- 张爱玲的残酷之美：止庵 博览群书(京) 2005.7 63-68
- 重释《传奇》的经典意义：金宏建 重庆社会科学 2005.8 59-63
- “国难当头时卿卿我我的一族”：从张爱玲研究谈起 李惠敏 文艺报(京) 2005.9 15 第2版
- 论张爱玲散文语言的陌生化：施永秀 山西高等学校社会科学学报(太原) 2005.9 99-101
- 张爱玲小说中的“残缺性”：吴筱晗,龚举善 哈尔滨学院学报 2005.9 68-70
- 论张爱玲的最后遗作：夏志清 万象(京) 2005.10 1-5
- 《描金凤》、“女汉奸”及其他：陈子善万象(京) 2005.10 6-13
- 女人血泪中的黄金, 黄金梦魇中的女人：张爱玲《金锁记》的性别意识与文化沉思 何希凡 名作欣赏(太原) 2005.10 48-51